

# 万葉内海の鶴

— 歌と風土 —

## 一

今日は「万葉内海の鶴」という題でおはなししようと思います。お聞きいただきますにあたって、どうぞ皆さんが今日という日に、甲南女子大学の講堂にいらっしゃることを、約一時間お忘れいただいて、千三百年前の瀬戸内海の心になって聞いていただければ幸いです。今日の歌は、天平八年（七三六）の遣新羅使人の歌が多いんですが、その歌は今から千二百五十年ほどの前になりまして、今のうちに、一晩で別府に行ける瀬戸内海ではなくて、手こぎの舟で約一月近くもかかる内海です。まず、もとの時代の内海に戻して見なければなりません。また、当時の瀬戸内海の風土に、できるかぎり戻して見ようということです。そしてまた、歌は生きた心の音楽と

犬 養 孝

してつかんでゆこうと、そういう気持でお話してゆこうと思います。

## 二

さて内海の鶴を理解するためには内海の風土ももちろんながら、鶴全体についても、いろいろの準備をしなければなりません。先ず万葉集の中で鶴はどうなんでしょうか。鶴つるともいったことは「嘆鶴鴨」つるかみ（巻十一—二五—二二）とあるのもわかります。けれども、万葉集の中では、一字一音の仮名でかいてある時は、全部「たづ」です。多頭・多豆・多津などとあります。「たづ」というのは、歌語であろうといわれています。その「つる」「たづ」というのは、今日からいうならば、なべづる、まなづる、たんちようづる、くろづる、そでぐろづる、あげはづ

る、などで、こういうのを「つる」「たづ」といったのです。万葉人は、一つ一つ、これは丹頂だ、これは、あげはだと区別してはおりません。ああいう恰好をしたのをすべてまとめて「鶴つる」「たづ」というんです。

その「たづ」は、われわれが今日見る動物園の鶴などとはちがって、もちろん野生です。こんにちでは、日本では三ヶ所だけしか、鶴の来る所はありませんが、万葉時代には、どこにでも鶴が来ていました。だいたい、万葉集に出てくる鶴はいくつかというと、鶴は四六首あるんです。四十六首四十七回、何故かといえば、

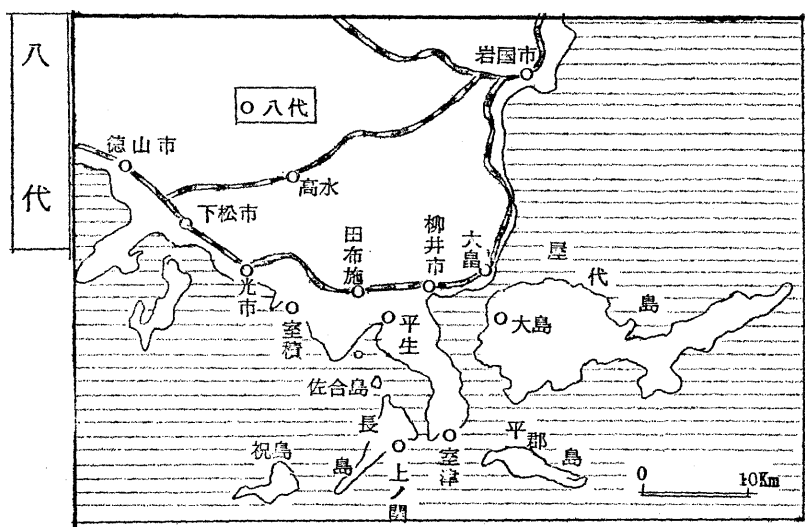
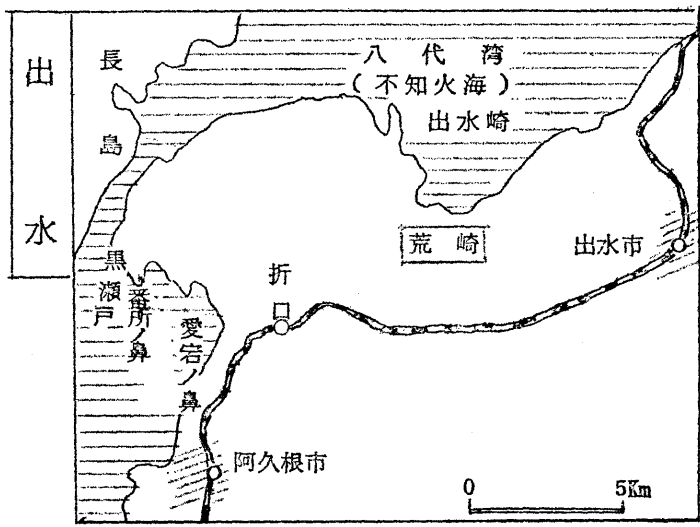
桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市瀉あゆもた

潮干にけらし 鶴鳴き渡るたづ（卷三）二七一、高市黒人の歌の中に鶴が二回出ますから四十七回になります。鶴は各所に来ていますが、一番多いのは、難波なんです。難波での十一、このことを覚えておいて頂きたい。何故、難波にそんなに多いのか。それから瀬戸内海は、五つあるいは六つです。その他、越中にも出てくれば、今の奈良県、静岡県、その他方々に出て来ます。万葉時代に沢山来ていた鶴が、いつまで来ていたかという、江戸時代から明治の初めまで来ていました。浅草の観音様で明治の初めに、鶴が卵を生んだこともあります。我々の現代になってから、鶴が来なくなりました。明治二十五年

に保護鳥令が出来た時は、鶴達は、みんな乱獲されてなくなっていたんです。北海道の方では鶴の塩漬まで売っていたということです。

現在、日本で鶴の来るところの三ヶ所は、まず、一つは、鹿児島県で出水郡荒崎付近一帯です。この辺は、この頃特に多くなって、約四千羽近く来ているようです。ある時のこと、ぼくは、「折口」という駅で降りまして、「黒の瀬戸」これが万葉集でいう「薩摩の迫門」ですが、そこへむかって歩いている途中に、白濁海岸の夜明けに、実に沢山の鶴の群を見た。そして、そこでは、鶴は、いつも四羽一組なんです。鶴は卵を必ず二つ生むんで、夫婦と子供二羽になります。その四羽一組が、群をなして、いっぱい夜明けの干潟に鳴いていました。しかも、鳴いていた時は、全部潮の干いている時です。潮が干いている干潟で遊ぶ。鶴は涉禽類で、水辺を歩く鳥です。そして飛ぶのは上手ですが、泳ぐことは出来ません。長い脚で歩ける範囲内を歩く。だから、潮の干いた所へ来るわけです。鶴が出水郡に來ている時期は、十月の末から翌年の三月上旬までの間、シベリアや蒙古の方から來ているんです。

つぎに、瀬戸内海では、山口県熊毛郡熊毛町やしろ八代という所です。ここは岩国と徳山との間をゆく岩徳線の高水



という駅で降りて、十分程タクシーに乗って行くと、八代の盆地に出る。その八代には、なべづる、まなづるが数は少ないが、百三、四十羽ほど来ます。かつて、瀬戸内海には、いっぱい来ていたのに、今、瀬戸内海で来ているのは、この八代だけなんです。八代の人が、鶴をものすごく可愛いがるからでしょう。

その次は、北海道釧路の湿原にいる鶴です。かぞえて二百五十羽といわれています。ぼくらは、五年前に行き、今年も二月にいきまして、二百羽ほど見て来ました。釧路では、冬季に二三ヶ所、餌つけ場を見ることが出来る。これは、冬になりますと、食べ物が見失くなくなるので、湿原からこれらの餌つけ場に集ってくる。一時、絶滅しそうになったので、明治の中期から、餌つけをやった。それが成功したんです。まず、釧路の空港で降りて、鶴公園で予備知識を得て、阿寒町の山崎定作さんという人の家の雪原にゆく。そこは、鶴が見られる様になってきます。鶴を見るのは、二月がいちばんよい。二月だったら、一番数が多くて、二月は交尾期ですから、鶴の舞が見られるわけです。また別に釧路川の上流、幌呂川にも来ます。幌呂川の上流の鶴居村中雪裡という所がある。その伊藤義央さんという方の農場で、こんどは七十羽程見ました。それから、次に、下雪裡の、渡辺義

明さんという所で、六十羽ほど見ました。冬になると、鶴はその餌つけ場にいて、夜は、川の水は温かいんで、川の中に入って寝る。そして、寝る時は、寒いもんですから、脚は一本にして、一本は羽の中に入れていきます。そして長い頸も羽の中に入れて、白い丸いおだんごのようになって、寝るんです。三月の終りから湿原に出て、四月の終りから五月の初め頃、必ず卵は二つ生みまます。そこで、さきほど四羽一組と申しましたが、北海道だけは、どなたに聞いても三羽一組なのです。それは北海道では寒くて二羽育てきれないので、自然の摂理で、一羽は、こわしてしまふ、あるいは、放っておいて、鳥なんか食べてしまったりするんです。この湿原で子供を大きくして、九月、十月ぐらいになると、だんだん餌が失くなるので、中雪裡や下雪裡や阿寒町の方へ、鶴は集ってくる、そういう生活です。

### 三

そこで、まず、潮の満ち、干きということです。おもしろいことに、鶴の歌は、潮の満ち干きとの関係が多い。鶴と潮の満干の話にはいる前に、人間が、潮が干いた時に、どんな感情を持つでしょうか。それから、潮が満ちてきた時、どんな感情を持つでしょうか。それを調

べてみましょう。調べる前に、ぼくの直感を先に申しませぬ。今日、一般の人は、潮が満ちようと、干こうと、そんなこと気にとめている人はほとんどいないでしょう。第一、干いているのか、満ちているのか、わからないのが普通だろうと思います。ところが、海岸にいる人や、船で航海する人、ましてや手こぎの船で行く人にとって、潮の満ち干きは、もう一番、気になるところです。

では、その場合、潮が干く時と満ちる時では、人間の感情はどうなるか、ぼくの直感で申しましたら、干いている時は、みんな人間は、海の方へ、海の方へと心ひかれていくんです。ということは、潮が干いたら、今まで、海の底であった所が露出しますから、そこで、潮干狩ももちろんできる、ウニをついたり、タコをついたりして、岬で遊んだりします。山の中の人までも、大潮の時などには、山からおりてきて、浜辺で遊んでいます。浜辺は、とても賑やかになります。即ち、人間の心は、潮の干いた方へ、干いた方へと寄って行くということですよ。

こんどは、潮が満ちてくる時は、本当に、不安な気になります。だって、今まで、岬の先で、歩けた所が、深い所になりますし、今まで、歩けた砂浜はなくなつて、もう満々とみちてくる。そういう頃には、海岸には、人

っ子一人いなくなります。人間は大勢ですから、その反対の気持の人も、いるかもしれません。けれども、万葉の歌を見ても、なんとまた、潮の干いた時には、みんな、心が海の方へ向き、潮が満ちてくると、なんと、そこから離れていくのでしょうか。

#### 四

では、歌をしてみましょう。

難波瀉 潮干のなごり 委曲よこ見てむ  
家なる妹が 待ち問はむため

(巻六―九七六、神社老麻呂)

潮が干くと、そのあとの砂浜にいろんなものが露出している。それが「潮干のなごり」です。潮干のなごりをよく見ていこう。だって、海を知らない大和の人達ですから、潮の干いたあとの状況をみやげ話にしたいと、いっているんです。潮が干いた歌は、二十五くらいありますが、みんなこんな風に、干潮の海に心ひかれていませぬ。もちろん、実際の満ちでなくて、「潮の満ち干きは常ないが、そのように……」といった、たとえに歌われているものは別ですが、そういうのは、四、五首しかありません。

もう一つ、

潮干の 三津の海女の くぐつ持ち

玉藻刈るらむ いざ行きて見む(巻三―二九三、角麻呂)  
の歌を見ても、難波の三津の干き潮時に、海女が、手さげ袋の様なものを持って、海藻を刈っているだろう場面を思い描いて、さあ行って見ようと、干潮の海岸に心ひかれてはずんだ気持です。

それに対して、こんどは、潮が満ちてくれば、

多由比瀉 潮満ちわたる いづゆかも

愛しき背なが 吾がり通はむ (巻十四―三五四九)

多由比瀉というのは、どこかわかりませんが、「多由比瀉は、ずっと潮が満ちわたってきた。だからどこを通って、いとしいあの人(男)が、私のもとに通ってくるのだらうか。潮が満ちてしまつて、通れる道がないんじゃないか」という風に心配している。

そしてまた、

悔しくも 満ちぬる潮か すみの江の

岸の浦みゆ 行かましものを (巻七一―一四四)

「悔しくも、こんなにまんまんと潮が満ちて来ちゃったのか、すみの江の岸の浦みを通して、歩いて行こうと思つていたのに」というわけで、潮が満ちてくると、こんな風です。その他をあわせて満潮の場合は約二五ぐらいで、満干半分分ぐらにならましよう。

## 五

満干のこのちがいをこんどは、鶴にもつていつてみると、鶴は本当に人間の気持と同じです。鶴はさきほど申した様に涉禽類です。そして、しかも泳ぐことが出来ませんから、水の高さがせいぜい膝につかるぐらいを歩きます。歩いて餌をあさるんですから潮が干いた所へ干いた所へと行くわけです。潮が満ちてきたら、鶴は、どんどんと海から離れるんです。その一番はつきりした歌が、ここにあります。それは、高市黒人の、

桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市瀉

潮干にけらし 鶴鳴き渡る (巻三一―二七二)

たいへん、音楽的な歌です。空の一角を見上げて、なんと明快に、飛んでゆく鶴の群をつかんでいるでしょうか。それは、何のためにといえは、潮が干いているから、干いている方へ行くんです。「桜田の方へ鶴が鳴いていくよ。ああ、もつとむこうの年魚市瀉は、潮が、干いたんだなあ」と、潮の干いた方へ行くんです。ところが、全然そうでない解釈をした方がいらっしやいます。山田孝雄博士の『万葉集講義』には、年魚市瀉が潮が干いたから、餌があされなくなったので、そこから離れて桜田の方へ行くと書いてあります。これは、鶴の生態を、よく

ご存じなかったのだらうと思います。鶴は必ず、人間がそういう気持を持つ様に、潮干の方へ潮干の方へと行くんです。そこで、桜田から年魚市潟にかけての広い空間をバックにして、潮干の年魚市潟へと、飛んでゆく鶴群にみとれているんです。

こんどは、越中の鶴です。

奈良の海に 潮のはや干ば あさりしに

出でむと鶴は 今ぞ鳴くなる

(卷十八—四〇三四、田辺福麻呂)

奈良の海というところ、高岡の東北の新湊付近です。「奈良の海に潮が早く干いちゃったら、餌を探しに出かけようと、鶴は今こそ、鳴いているぞ、その鳴き声が聞こえてくるなあ」といった気持です。これも、潮がひいたから鶴があさりしに出かけるわけです。

潮干れば 共に潟に出で 鳴く鶴の

声遠さがる 磯みすらしも (卷七一—二六四)

「潮が干いたもんだから、共に、潟に出て鳴いている鶴のその声が、さらに遠ざかってきこえる。潮の干いた遠い磯の方に行って餌をさがしているのかナ」というわけです。ほら、鶴はみんな潮の干いた方へ、干いた方へと行くんです。四十六首を見たらよくわかります。

ところで、潮が満ちてくると、こんどは、楽しくて鳴

くのではなくて、不安で、互いに相捧を呼びあうんです。満潮時の、人間の心を鶴におしあててもいるのでしよう。

夕風に あさりする鶴 潮満てば

沖波高み 己が妻呼ぶ (卷七一—二六五)

夕風にあさりしているのは、もう潮が干いているという事です。潮が干いた夕風で餌を探している鶴は、潮が満ちてきて沖の波が高いので、自分の相捧を呼んでいる。大体、潮の満ちる時は、風が吹き波がたつてきます。鶴の気持は鶴に聞いてみないとわかりませんが、人間から見れば、沖の波が寄せてきて、潮が満ちてくると不安な気持になる。そこで鶴だってそうだろうと思うわけでしょう。涉禽類の鶴はさきほど申したように泳げないんですから。

また、有名な歌で、

わかぬ浦に 潮満ち来れば 潟を無み

葦辺をさして 鶴鳴き渡る (卷六一—九一九、山部赤人) これは、また素晴らしい歌です。歌の律動、歌の音楽が、全部、岸辺の方に向いている。わかぬ浦に、潮満ちくれば、潟を無み、葦辺をさして、鶴鳴き渡るという風に全部律動が岸辺向きです。しかも、この歌の素晴らしいのは、「葦辺をさして」とあるから、絵画的なコンポジション

ヨンとして、鶴が画面の外へ出ないで、ちゃんと、葦辺を岸の方に置いて、その手前、中央に鶴を置いてある。本当にみごとな絵画的なコンポジションです。そういう意味からいって、山部赤人ののは、まさに、美の典型を生み出しているといつてよい。山部赤人は、わかぬ浦に来て、非常に感激している。万葉の時代に、誰でも海を知らない大和の人は、感激するでしょう。あるいは、旅愁を感じ、大和の方を恋しいと思うのが、普通です。

だから、

玉津島 見れども飽かず いかにして

包み持ち行かむ 見ぬ人のため (巻七一三三)

とうたつて、夢中になっている。これは、普通の人です。素人といつてもいいと思う。素人は、みんな、それくらいいしかいえないんですから。だから「玉津島」の歌の地名を代えたら、

富士の山 見れども飽かず いかにして

包み持ち行かむ 見ぬ人のため

ともなる。普通の人は風土というものに対して、極めて、従順です。風土の中で、素直に、自分の叙情を訴えるわけです。素晴しいとうたつたり、旅愁を感じて大和が恋しいとうたう。ところが、山部赤人なんか、旅愁も感じたでしょうし、素晴しいとも思ったでしょう。それ

を一言もいわないで、おさえて、一つの美の景として描いてみせている。これは、やっぱり山部赤人などというのは、今日の言葉でいえば、まさに芸術院会員みたいな人ですから下手な歌なんて、作りません。美のコンポジションをちゃんと守っている。だから、この歌が、一つの美の典型として、後代に、命をもつわけです。だから、命を保つ証拠といえ、どうでしょう、このわかぬ浦は、第一、和歌浦といま書いている。海岸に砂洲が出来れば、片男波海岸という。そして、名勝を作れば、新和歌浦、この間まで、雑賀崎国定公園といつていたのを、このごろでは、奥新和歌浦という。これも、この頃は省略して、奥和歌というんです。そして、しかも旅館が出来れば、あしべ旅館、旅館新あしべ、みんな、この歌からです。それに、和歌山県という字を見たらわかります。もと「若山」を「和歌山」と書く。もちろん、この歌からです。だから、ぼくは、あの和歌浦の海を失なつたなら、和歌山県は和歌山県の象徴を失なうことになるといつていいんです。

## 六

それでは、こんどは、これだけのことを承知した上で、潮戸内海へ出てみましょう。で、最初の歌、



朝びらき　こぎ出て来れば　武庫の浦の

潮干の潟に　鶴トビが声すも　（巻十五―三五九五）

難波を出てから先ず、武庫の浦に出る。武庫の浦というのは、西宮の方です。武庫の浦は、昔の武庫川の河口付近でしょう。昔は今よりも、海がもっともっと奥にはいりこんでいました。この歌は、遣新羅使人の歌で、天平八年（七三〇）真夏の歌なんです。出発してから、一と月近くかかって、山口県の周防灘（佐婆の海）では、一行は、遭難するんです。なにしろ、手こぎの底の浅い船ですから、大変な難儀です。

話はかわるけれど、一般に万葉集を読む時、大抵の人が忘れてることがあります。それは、万葉集の一首一首は、みんな歩いた人の歌だということです。もう今日一般に歩く感覚を失っているようです。学生諸君だって、万葉旅行で、十キロも歩いたら、もうへとへとです。それで、これからは歩けない人が万葉集をよむんですから、ずい分変わってくると思います。「歩けるはずがない」なんていうことになるでしょう。海上の場合は、手こぎの船で、帆は、使いますけれど、人力と自然の力だけで、機械を使わないんだということを頭において見なければなりません。

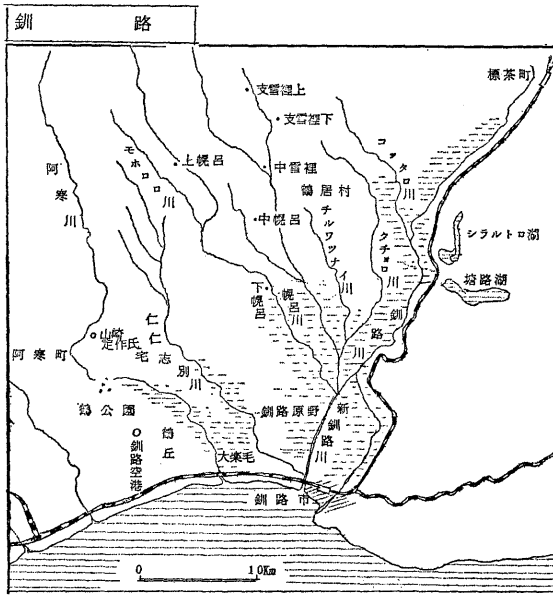
遣新羅使人らが天平八年の真夏、朝、湊をこぎ出て、

武庫の浦の潮干、の潟、で鶴があさをしているわけです。

難波を出て、まだ、間もない時です。夜は、万葉人は、みんなおそれていました。「ぬばたまの」はただ単に夜の枕詞でカッコの中ではなく、夜へのおそれつつしむ心からです。だから、その「夜」がすぎて朝になった喜び。朝、船を出して出てくると、武庫の浦の、ずっと潮が干いている所で、鶴の声がしているぞという、夜があけた喜びの気持もあるでしょう。その喜びの心が目の前の景観に即して、あらわれたみずからの旅心です。

ところが、ここで、大事なことがあります。今日来る鶴は、丹頂鶴は北海道だけです。そして、八代と出水郡とは、なべづる、まなづるです。ほくは、このことは、万葉の時代も同じではないかと思えます。今日、出水郡の方には、たまた、丹頂鶴が、一羽ぐらい、まじる年があるようですが、それはまぎれこんで来たんでしょう。だから、内海やまた本土の鶴は万葉時代では、なべづる、まなづるのたぐいだったんではないかと思えます。そうならば、「わかぬ浦に潮満ちくれば」というのを絵にかけば、真っ白の鶴ではなくて、うす墨色の様な鶴ではなかったかと思えます。現代の鶴の分布状況から推してみれば、そうではないかと思えます。

そして、その上もう一つ大事なことは、天平八年の六



月、すなわち、いまの八月、真夏だということです。八代や出水郡では十月の上旬か下旬頃に鶴はシベリアや蒙古から飛んできて、一冬を過して、春三月には、帰って行きます。それだったら、真夏に、鶴のいるわけがない。今の状況でおしていけば、おかしいことです。九州のままでいれて、鶴の歌が五つ、六つあるのは、みんな天平八年の真夏のことです。今日の状況から見れば、真夏に鶴がいるわけがありません。ぼくは、そこに、疑問を持っていました。それが、だんだんわかってきました。それは、銚路の湿原に、五年前に行き、こんども、二月の末に三日間あそこに行きました。わりと暖かでしたが、零下十六度です。前の時は、零下二十三度でした。ところが零下二十三度で、ちっとも寒くないんです。かえって大阪へ来た方が寒いくらいでした。湿気が多いからでしょう。あちらは、快晴あるいは雪。どっちかです。湿原をあちこち歩きました。銚路の地図を見てください。銚路は、全く、みごとな、大湿原なんです。これは、ものすごく貴重だと思えます。湿原は、現在、まだ沢山残っているんです。川筋は自由自在、奔放に屈曲しつつ流れています。わずかにつけた道以外の所は、沼みたいになっていて、身の丈も立たなくなるし、大変です。いろんな所があって、湿原には、とても入れませ

ん。だから、鶴の写真を写す人なんか、本当に苦労しています。ぼくは、こんどは第一日は中雪裡に行き、次の日は、標茶しやまの方からずっと入って、シラルト湖へ行きました。ここでは、大白鳥が沢山いました。それから、塘路湖にも大白鳥がいた。そこから湿原に入るんです。道が一つあるんですが、そこをゆくとき、まだ湿原の中にいる鶴、湿原の中にいる大白鳥の群もみました。そして、こんどは、下雪裡の渡辺義明さんのうちへ行っただけなんです。こうしてみると、湿原は、なるほど、鶴のいるのに最適な所です。そこで最近の研究では、この丹頂鶴は、昔は、渡りをするんだという風に考えられていました。が、今は、そうではなくて、ここに、留鳥として残るということです。それは、定着するのに、丁度いい湿原があるから、夏になれば夏になるで人は、入ることは、もちろん出来ません。そして、ちゃんと木陰もあるし、水もあり、巣を営むのには最適なんです。だから、ここの丹頂鶴は、今は、ほとんど、渡るのではない。ここに居る鳥だということです。しかるに、この湿原は、最近では、やっぱり河川改修をやりはじめた。つまり、川筋の屈曲しているのを、真っすぐの川にするんです。真っすぐの川にするということは、どうということかというのと、事実上は、かえって、水害が多くなるのです。だっ

て、冬は全部雪です。それがとけたら、湿原のままなら、たっぷり水が入るわけです。それを、治水をしまっすぐと川筋をかえると、よく流れるけれど、堤防をこわしたり、水害が出る。大自然は湿原のままで、うまく出来ているんです。湿原に人間の手を加えると、かえって、鶴の居どころがなくなる。川が深くなると、鶴はいれなくなる。鶴の寝ぐらがなくなりまます。丹頂鶴のいるこの大湿原はなんとかして守らねばと思います。日本に、これだけの湿原は、もうないんです。日本ばかりではない、世界的にも珍しいそうです。これは、残さなければと思う。しかるに現実には、いつてみると、この湿原のあちらこちらに、杭が立っていて、何々株式会社開発予定地とかいてあります。こんど行ってみて、五年前と随分ちがう。五年前には、土地の方も、守らなければいけないといっていました。この頃はそれもいえない位の、実状になって来ているようです。非常に残念です。尾瀬沼を残したと同じ様に、あれだけのみごと大湿原を残さなければいけないと思います。これを、万葉だけに限っても、万葉を理解する大事な宝庫だと思う。万葉の鶴、あるいは万葉の山川を理解する上で大事です。たとえば、瀬戸内海に夏、鶴がいるというのは、武庫川の河口であるうと、岡山県であろうと何処であろう

と、今日の様な川の状態を思っではいけないわけですよ。ずばりいえば、治水工事の行えない昔は、川筋は、湿原、湿原、湿原なんです。だから、鶴が真夏にいるということは、丁度、釧路湿原に真夏鶴がいると同じ様なわけです。釧路湿原にゆき、湿原をしらべてみて、その事がよくわかりました。今の武庫川のところから、宝塚の方にかけても、まったくあそこは、昔は湿原状態です。鶴は、いくらでもいることが出来る。万葉に難波の鶴が十一も出てくるということは、生駒山から大阪の上町台地のあるところにかけて、かつては、大湿原だったからでしょう。淀川や大和川の水は、ここに入り乱れているわけです。江戸時代の初期に、大和川の水を、堺にまわしてから、中河内・北河内が干上ってきましたが、さきごろまでも湿地が多い状態でした。昔は大湿原だったでしょう。そこで、亡くなられた風巻景次郎さんは、北海道札幌の北大におられたから、「葦が散る難波」という論文を書いておられる。この「葦が散る難波」(『風巻景次郎全集』第三巻所収)というのは、釧路の大湿原を見られて、淀川水域の湿原を考えられて書かれたものです。

万葉時代には、児島半島は半島ではなくて島だったんです。岡山の倉敷など、昔はもちろん海のふちだったし、その後は、ずっと湿原状態です。それを、中世ぐら

いから干拓して、何々新田、何々新田と出来た。万葉時代のこの辺の湿原状態も想像されます。して見れば、武庫川流域の湿原状態も充分に想像されます。

朝びらき　こぎ出て来れば　武庫の浦の  
潮干の瀉に　鶴が声すも

の歌も、実感として、よくわかって来ます。

つぎは長い歌の一節なんです。

……あかときの　潮満ち来れば

葦辺には　鶴ト鳴きわたる…… (巻十五―三六―二七)

これは、明石の付近らしい。そうすると、鶴はあのおたりにも沢山いたんです。夜明け方の潮の満ちる時です。鶴の歌は、前申しましたように、潮干か潮満ちかに関係しています。あかときの潮が満ちてくるといふと、鶴は背が立たなくなりですから、葦辺の方に、葦辺の方にと、鳴き渡っていくとある。また、

ぬばたまの　夜は明けぬらし　多麻の浦に

あさりする鶴ト　鳴き渡るなり (巻十五―三五―九八)

さっき申しました様に、ぬばたまの夜はあけた様だといふだけで、もううれいでしょう。そうしていると、どうでしょう。多麻の浦の所で、今、潮が干いている。そこで、餌をとっている鶴の鳴く声が、こっちまで聞えてくる。空の広さまでも思われるみたいです。その景を

描くことで、夜が明けた喜びの気持の中に、旅心のわびしさも出てくる、そういう状況です。そして多麻の浦というのは、何処かわかりませんが、大体、岡山県の今の玉島の付近ではなかるうかと思う。異説もあるけれども、あの辺の所は全く湿原状態だったんです。さき程申した倉敷の方が、ずっと海とも、陸ともわからない様な状況が長く続いていた所です。そうしてみれば、真夏に鶴がいても不思議ではありません。

また、

鶴が鳴き 葦辺をさして 飛びわたる

あなたづたづし 独りさ寝れば（巻十五―三六二―六）

これは内海の旅の時の歌ではなくて、古歌をうたったものです。鶴が鳴き葦辺をさして、とびわたって行く、そのたづではないが、あなたづたづし、という所に使っています。ここにも鶴が、潮が満ちてきて、だんだん葦辺へ葦辺へと行って、さわいでいる姿がわかる。

で、次に、

沖辺より 潮満ち来らし からの浦に

あさりする鶴 鳴きて騒ぎぬ（巻十五―三六四―二）

からの浦は、どこかわかりませんが、山口県熊毛郡室津の半島の付近だろうと思います。その中の何処かでしょう。ここにもまた潮干潮満ちがあります。沖辺から潮が

満ちてくる様だ、人間の気持は、それに対して、こわい、早く逃げようという気持になる。潮が満ちてくるとからの浦の潮が干いたところで、あさりしている鶴が、もうおそろしく、不安に思っ、鳴いて騒いでいる。もちろん、人間の気持を鶴の生態にもそっくりうつしているでしょう。そうした景観の中におけるわびしさを訴えているのでしよう。

で、次はもう博多です。可之布江かしふえって、今の香椎潟です。もちろん、今は地形がすっかり変わっていますが、丁度、六月のはじめに、出たのに、博多ではもう七夕になっています。

可之布江かしふえに 鶴鳴き渡る 志賀の浦に

沖つ白波 立ちし来らしも（巻十五―三六五四）

これも満潮です。可之布江の岸边の方へと鶴がずっと、鳴いていく。博多湾の口もと、志賀島の志賀の浦の方で、沖の白波がぐんぐんたつてくる。満ち潮になってきたな。潮が満ちてくるので鶴は岸边へと鳴いてゆく。

香椎のあの辺の所にも、真夏に、鶴がいっぱいいたことがわかります。以上は、遣新羅使人の歌の中、天平八年六月の歌ですが、そうではない歌で、少しおはなししてみましよう。

## 七

旅人の 宿りせむ野に 霜降らば

吾が子はぐくめ

天の鶴群たのつるぐむ

(巻九一―七九一)

この歌は天平五年、丹治比広成が遣唐使になつて行く時に、後に残る、旅に出ていく人のお母さんがよんでいける歌です。「旅人が、宿りをするであろう野にもしも霜が降るならば、その時は我が子を大事にしてくれよ、羽ぐくんでくれ、天の鶴群よ。」歌の意味はそれだけです、これももつと実際に古代の姿を思うと、よくわかると思えます。われわれ、一般には、動物園の鶴しか思いません。実は、この歌一つにも当時の湿原の状態が想像できると思えます。作者は鶴の生活をよく知っているのです。自分の周囲にも湿原の所はいっぱいなんです。鶴は夫婦仲がいいばかりでなく、子供をとても可愛がる。だいたい三十三日かで卵がかえるんです。かえすのには夫婦がかえず、互に交代で暖める。かえると鶴は子供の時には、ちゃんと水かきがついている。なぜかといへば、親が膝ぐらいの深さでもピシャピシャ入るでしょう。子供はそんな所立つことができな。だから水かきで泳ぐのです。その水かきは、生まれて十月ごろになると、水かきの痕跡をのこすだけになる。親のあとを泳い

でゆく姿は、とてもかわいようです。そういうのを見ているから「我が子はぐくめ」というのでしょう。

古代の人は、そうした生活を自分たちの周囲で見ているわけです。われわれが、万葉から学ぶこととして盡きないものがあります。万葉は、われわれが、日ごろ忘れていける心の原点の集まりといつてもよい。今、大阪大学の学生と一緒に万葉の旅をやっていますが、今、百六十三回目です。延べ三万人の学生が来ています。なぜかといへば、現地で、忘れていた人間の心をよみがえらせるよるこびだと思えます。「天の鶴群」の作者も、釧路の湿原で見ると自然にとりまかれていけるから、これだけの深い心が言えるのでしょう。

## 八

では、最後に、これで内海の西の端まで行きましたから、われわれも大和へもどってきましょう。

天離る ひなの長路ゆ 恋ひ来れば

明石の門より 大和島見ゆ

(巻三一―二五五、柿本人麻呂)

長い間の船路の苦勞をしてきました。

それではもう一つ、同じく船に乗る人の歌で終りましょう。

島伝ひ 敏馬の崎を 漕ぎ廻れば

大和恋しく 鶴さはに鳴く (巻三―三八九)

いまの神戸の敏馬の付近にも、鶴がたくさんいたことがわかります。鶴は、なんで鳴いているかわかりませんが、望郷の思いに駆られている人間にとっては、天をつんざくような甲高い鶴群の声は、望郷のせつなさにかよって、「大和恋しく」と感じられるのです。鶴群の鳴き声は、四キロから五キロの彼方まで聞こえます。

内海に沿う湿原を背景に、鶴群の棲息していた古代の風土を思うと、内海万葉の鶴の歌が、風土といかにこまかに密着していたかの実相を知ることができます。